

労金で「社内預金」対策

一人当り七万円失ふ

「今は金がな」と振舞われています。さらに勤務先の会社や組合に訴えます。主として一人当り七万円も貯金してゐないものだ」と重信につづいたのです。

またよくに注意をひくのは、昭和三十年ごろまでの社内預金はたゞ金に金がついて、銀行で金が高くなつたことだつたのだから、銀行が貸出競争をする時代になつてゐます。それでもなお一段と金に金がついてゐるのだから、部分的ですが預金の引上げが、社内預金制度の拒否を決する組合も出てきてゐます。

昭和二十九年ごろ一貫して社内預金対策を取上げた全労協労働金庫協会は、これからの社内預金対策をつきのうちから話してゐます。

まず社内預金のねらいにたいしては組合員を分裂させ、労働者の組合員を分裂させ、労働者の

「炭塵」が初刊行される

四山寺部行脚隊で結成している文学サークルではじめて機関誌「炭塵」がだされた。菊判五十二頁できれいなプリント印刷である。内容も創作五篇、詩十八篇を中心に盛りたくさんで、非常に裏面に「ライオ」なく版目まで入り、是と

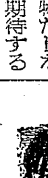
材から離れて書いたら、もつと印象の鮮明ないい作品になったろう。

△創作「母」 感覚的な言が酸じられる。おちついた深味のある作品だが、プロット（構成）について少し考慮しにほしかった。

えのある文芸誌である。

作品については職場文芸誌としての体臭が稀薄なつたのが物たりなかつたが、それは今後に期待するとして、とにかくこんな雑談がどしどし出て、しかも永続することがかんから期待される。

△創作「わかもの日記」つづきも



母

蒲

池
哲
夫

「オツカさんの死なしたぞ」
俺の中学二年の十一月十九日、
丁度メジロ落しが始まる頃だつた
その日、トリモチを買つて、それ
を入れる容器を貰ひに、山鹿の町
内に嫁いでいる姉の家に行つてい
たら、母の死を知らせに来た兄が
そう云つた。瞬間、シーンとした
何もかが、身体中を駆け巡つた
地の底に、突然ひきずり込まれた
ようなものだつた。母は病気で、
八年間もの長い間寝ていたので
俺はその日も別に母の顔を見ずで
もなく、いつものように学校に出
たのだつた。

が、死者の出た家の著を見る、あ
の暖簾を止したような特有の情の
ある、何か、近より難く、遠くか
け離れた存在となつた著を、見る
ような目で見られ、いつも余えは
声をかけてくれる人でもその日は
遠慮してか、なんとも慰めようが
ないから真正面から見てくれない
のでたまになくなつてカバンを助
にかかえ上げ、走つて帰つた。家
の敷居をまたぐと、葬具を運つた
り、料理等をやる近所の人達が、
仕事の手を止めて、俺の方を振り
向かれ、一瞬、シモンとなつてし
まつた。

むなしい事だといふような感だけ
が湧いてきた。その夜たゞ座つて
一睡もせず送つた。

翌朝、庭で火を燃していたら担
任の先生が来られた。その顔を見
た途端、俺はなんとなく笑ひかけ
たように想う。神妙な顔して来ら
れた先生は意外だといふような顔
をされた。空虚感にとり囲まれた
俺に、先生は救ひだつたかも知れ
ない。

納棺は、父、兄姉連、甥、姪と
家の者だけでローリングをとあして
本当にやせて、格はつた骨と皮は

一寸間を置いてから、思ひ出したように土を投げ入れ始める。始めは、少しづつだが、だんだんと多くいれるようになり、とうとう樽は見えなくなる。無慈悲な人の手がクワで入れ始める。

「止めてくれ」と叫び出したくなるような衝動にかられる。みるみるうちに穴はなくなつてしまつた。小高く土を盛り上げて、正面に戒名、側面に年行五十八才、徳永ハルエ、と書いた木の香りとスミの香の匂う墓標が立てられた。見ているのが辛くなり、一人で家に急いで帰つたが、まだ家に帰つて

り、飯も一人で食べられなくなり、足も膝を曲げて立つたまま動かないようになつていた。

さぞ辛かつたことだろうと思ふが、そんなつても母は愚痴一つこぼさずに居た。酷評すれば、生ける屍同然だつた母についての記憶の主なものは、四、五才迄山嵐に芝居を見に母に連れられて行つたが、相当ないたずらはやつていたようだが、根は愚痴者だつたらしく、芝居を見るどころではなく、チャンバラの場面になると恐しいものだから「小便に行く」といつても母をひひつて行つて、出もし

逐にか、という、儼然が先きに立つて、なにもかもなかつた。同村から通つてゐる友連と二人で帰つてゐたが、姉の家を出ると同時に「ぬしや、どがんにやつた、色ん裏書かぞ」と驚いて尋ねた。こゝろはつたような声で「オツカサンの死なした」といつたら、アツケにとられたようになつて俺の顔をみつめてゐた。それから一里半の道を帰るのに一言もいはず、道の砂ばかり見つめて、友連がどとで別れて帰つたのか、気のつかぬ程落着きをなくしてゐた。權平訥落に入つてから、俺を見る村人の目

その中で俺達が俗に「西のオバサン」と呼ぶ本人が「テツチャンがね、まだこまてか」とあとは涙声になつて、聞きとれなかつたがそのいつて、今までに目が赤く充血する程泣いて泣かれたらしいのに又目を押えて泣き出された。今まで緊張してゐたが、一度にとれ（あんな時を感極まつてというのだから）立つたままワンワン泣き出してゐた。あちこちで貰ひ泣きのすすり声が起つた。

塵敗に北向きに、母は寝かせてあつた。その枕元に絞服を付けた父が墜り、その次に兄が墜つてい

かりのようか母の体よりきつぱり泣きながらやつた。その時、その年の正月家族全部で撮つた写真と一枚額えたが、その写真に「いや、ばいおかしな」といつてどうしても写らなかつた兄の長男、その時は泣きながらローソクを握つてゐたが、それから約一年後川に泳ぎにいつて溺死した。

その甥の顔も、頭に残つてゐるだけになつたが、たつた一枚の写真でも、死にうちものになんか神秘の宿命的なものを感ぜさせる。

家での評議が讒説や焼害等やつて終るまで、連葬に行く村外れの小

座敷に上り、いままで母が八年間
置っていた場所にもなく、たゞ少
し変色しかけた青畳だけしかない
のを見てぽう然となり、又立ち崩
れてしまった。あの母の身体から
出ていた一種異様な臭気も確には
懐しい母の香として、残つてゐる
がその匂いもかげもなし。空虚、
虚無、そんな言葉がビツタリだつ
た。

母の病名は、今でもはつきり知
らないが、母が倒れた当時、俺は
小学一年だつた。モチをつつてゐ
たのか、コンニャクを作つてゐた
のか覚えていないが寢にはウスが
ない小便を申し訳みだしたにちよつ
と出して、その階板の上に大分
座つていたように思ふ。いま考え
るとその芝居見物も、一生の内に
何度、本当に救へる程しか行な
かつただらう。慰安の最後のものだ
つたやうに思ふが、母も世間で僕
所までついて来たのだと母に対し
て気の毒な苦笑が顔にくる。

小学二年頃だが、十五口誂とい
うのを覚えてから度々きなされた。

【次頁へつづく】

筆者は四山支那ノ旅談より



痛烈な風刺としみじ
みとしたペーソス
チャップリンの
ニユーヨークの王様

ヨーロッパの一小王国エストロヴィアの王様シヤドフ（チャールズ・チャツプリン）は革命のため国を追われ、アメリカへ亡命した豪華なホテルに避難した王様は早速街へ散歩に出かけた。街全体がしゃべつてゐるような騒音、ロツクンロールに踊り狂ふ若者たち、性換映画や西部劇の窮乏合ひにびつくりしてホテルへ逃げて帰つた。

翌朝、一大事が持ち上つた。総理大臣が王様の財庫をそっくり持つてドロンを決めたのである。王様は一文なしになつた。王様と

て今後の生活を考えなければならぬ。そこへ隣の部屋から聞こえてくる女の歌声——王様が鍵穴から入らそつとぞくと美女が風呂に入つてゐる。彼女アン・ケイ（下シヨウ）は王様を自分のテレビ・シヨウに出演させようとの作戦である。アン・ケイに惚れ込んだ王様は彼女の作戦にまんまとひつつかかり、放逐されているとは知らな

いでいい御機嫌になつて大はしゃぎ。王様はカンカンになつて怒つたが彼の禁、一睨で金米の人気者になつてしまつた。



共産主義者のかどで非米委員会(の調査を愛することになり、少年も追われていた)で、王様のところへ逃げ込んだわけである。やがて少年は王様の配置で逮捕され、王様も少年をかくまつたかどで委員会に呼び出される敵目におあいづつた

王様は委員会に出席する途中、ふとエレベーターの中で消火ホ

たが委員たちは頭から水を浴び湯内は大洪水。とも角も王様の嫌疑は晴れた

だが王様は自由の國アメリカに託した希望のすべてを失つた。今や何をすべき元氣もなく、ふたたびヨーロッパへ帰る決心を固めた

王様はアン・ケイルとバート少年に別れて機上の人となり、眼下にひろがる大ニューヨークに最後の一二つを授けかけるのであつた。

(廿五日、からセントラルで)

逐に、かゝる、感慨が先きに立つて、なにもかもなかつた。同村から通つてゐる友連と二人で帰つてゐたが、姉の家を出ると同時に「ぬしや、どがんにやつた、色ん真背かぞ」と癪いて帰ねた。こゝろはつたやうな声で「オツカサンの死なれた」といつたが、アツケに上られたやうになつて俺の顔を引つめていた。それなら一里半の道を帰るのに一言もいわず、道の砂ばかり見つめて、友達がどこで別れて帰つたのか、気のつかぬ程落着きをおこなしてゐた。櫛形部落に入つてから、俺を見る村人の目

その中で俺達が俗に「西のオバサン」と呼ぶ人が「テツチャンがね、まだこまかて」とあととは誤声になつて、聞きとれなかつたが、そのいつて、今までに目が赤く充血する程泣いてゐられたらしいのに又目を押えて泣き出された。今まで黙張してゐたのが、一度にこれ（あんな時を感極まつてというのさうが）立つたままワンワン泣き出してしまつた。あちこちで黄い泣きのすすり声が起つた。座敷に北向きに、母は寝かせてあつた。その枕元に紋服を付けた父が座り、その次に兄が座つてい

泣きながらやつた。その時、その年の正月家族全部で撮つた写真を一枚添えたが、その写真に「いや、ばいおかしな」といつてどうしても写らなかつた兄の長男、その時は泣きながらローソクを握つてゐたが、それから約一年後川に泳ぎにいつて溺死した。

その頃の頭も、頭に残つてゐるだけになつたが、たつた一枚の写真でも、死というものに何かく神秘的宿命的なものを感ぜさせる。家での葬儀が経路や焼香等やつて終ると、埋葬に行く村外れの小

座敷に上り、いままで母が八年間寝てゐた場所は何もなく、ただ少し変色しかけた褥臺だけしかないので見てほう然となり、又泣き崩れてしまつた。あの母の身体から出ていた一種異様な臭気も俺には懐しい母の香と一つ、残つてゐるがその匂いもかげもない。空虚、虚無、そんな言葉がピッタリだつた。

母の病名は、今でもはつきり知らないが、母が倒れた当時、俺は小学二年だつた。モチをついてゐたのか、コンニャクを作つてゐたのか覚えていないが庭にはウスが

ない小便を申し附めたにちよつと出して、その階板の上に大分座つていたところを思ふ。いま考えるとその芝居見物も、一生の内になんて、本当に数える程しか行なかつただろう。慰安の最後のものだからに思ふが、母も世間で僕所までついて来ただろうと母に対して気の毒な苦悩が湧いてくる。

小学二年國だが、十五ヶ歳といふのを避てから度々かされた。

『鎌倉者は四山支那ノ波瀾ノより』

【次号につづく】